

栄山江流域の前方後円墳と倭国周縁域の前方後円墳

著者	辻 秀人
雑誌名	東北学院大学論集. 歴史と文化
号	42
ページ	69-100
発行年	2007-03-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1204/00024206/

栄山江流域の前方後円墳と 倭国周縁域の前方後円墳

辻 秀 人

要 旨

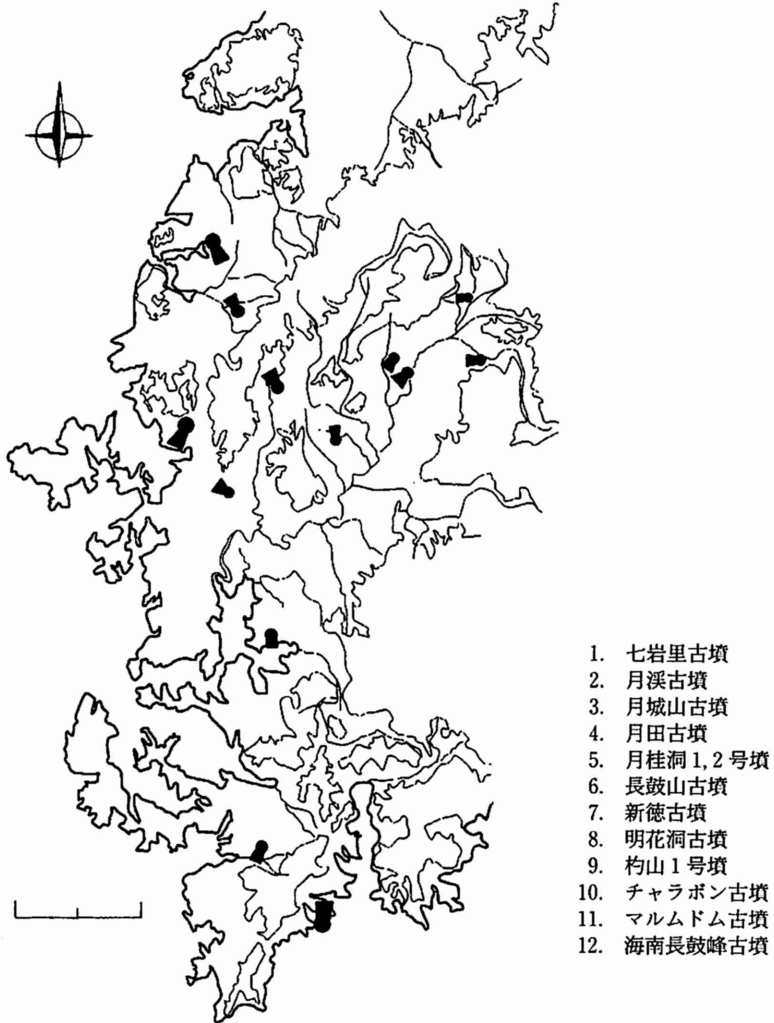
韓国栄山江流域に分布する前方後円墳についてはこれまで日韓双方の研究者により検討が加えられてきた。筆者はこれまで前方後円墳と認識されてきた栄山江流域の前方後円墳 13 基全てを観察し、倭国、中でも筆者がフィールドとする東北地方をはじめとする周縁域の前方後円墳と比較し、両者の異同を検討することが、その理解のために有効であると考えた。そこで、まず栄山江流域の前方後円墳 13 基について検討し、確実に前方後円墳であると認識した 10 基は倭国の前方後円墳の外形だけを模倣したものではなく、葬送の一連の行為が執り行われる場として作り出されており、倭国の 5~6 世紀の前方後円墳の姿を体系的に実現したもので、倭系要素が部分的に在来の墓制に受容されていることとは一線を画す必要があると考えた。また、墳丘の検討から、10 基の前方後円墳は墳頂平坦面の有無によって A、B の 2 グループに分けられた。A グループは相対的に古い様相をもつ 1 群で、古墳ごとに個性があり、その築造にあたっては個別に墳丘、石室の構築などの技術が集められて築かれていると考えた。B グループは前方部先端の作り方やくびれ部の様相などによりかなり強い共通性があり、B グループを築造した地域集団の間には前方後円墳のイメージモデルが共有されていると理解した。グループの違いを超えて、墳丘の構築方法や丘陵に対する墳丘の位置取りなど、栄山江流域前方後円墳に共通する特徴も看取できた。横穴式石室の検討では、柳沢一男氏分類の北部九州との直接関連型が A グループに、在地発展型が B グループに伴い、墳丘の分類と矛盾しないことが確かめられた。円筒形土器の検討では、3 系統のうち前方後円墳から出土する円筒埴輪系はまさに倭国の埴輪を同じ機能をもつものであり、その製作には在地の土器作りの技術が用いられていると考えた。このような倭国の前方後円墳と同じ葬送の体系を在地の技術を用いて実現した栄山江流域の前方後円墳は前代の在地の墓制とは断絶が認められる。そのようなあり方を考えるためには、倭国周縁域で在来の墓制にかわって前方後円墳が登場する倭国周縁域の様相をモデルとすることが有効と考える。本稿では人の移動による大規模な社会変動、地域社会の中に異なる文化を持つ集団の出現、在地社会の政治的判断の三つのモデルを検討した。現状では在地社会の様相を考えるための集落の様相や一般の墓制がまだ十分には分かっていないため、あくまで、推測だが、前方後円墳の実現に在地の技術が用いられている様相から、在地社会が大きく変動しているようには見えず、在地の人々が前方後円墳を築造するという選択を行った可能性があるのではないかと考えた。

1. はじめに

韓国栄山江流域の前方後円墳については、日韓両国の研究者により多くの研究成果が積み重ねられてきた。また、忠南大学校百済研究所によるシンポジウムをはじめとして、多くの意見の交換が行われ、日本と韓国の研究者の相互理解も深まりつつある。

筆者は、大和から遠く離れた東北地方をフィールドとして古墳研究に関わってきたことから、大和から遠く離れた存在である栄山江流域の前方後円墳のあり方に深い興味を抱いてきた。幸い、多くの研究者が前方後円墳とする 13 基すべてを見学、観察する機会を得て、倭国の前方後

円墳のあり方や東北地方における前方後円墳出現の仕方などとの共通点や相違点を認識するに
いたった。本稿では相互の比較をしながら、柴山江流域の前方後円墳の様相を考えてみたい。



第1図 柴山江流域前方後円墳分布図

2. 柴山江流域の前方後円墳

論を進める前提として、まず13基(註1)の前方後円墳の様相を、報告書あるいは先行論文に学びながら確認したい。

(1) 七岩里古墳(第2図) 所在地 高敞郡孔音面七岩里淵洞村東側

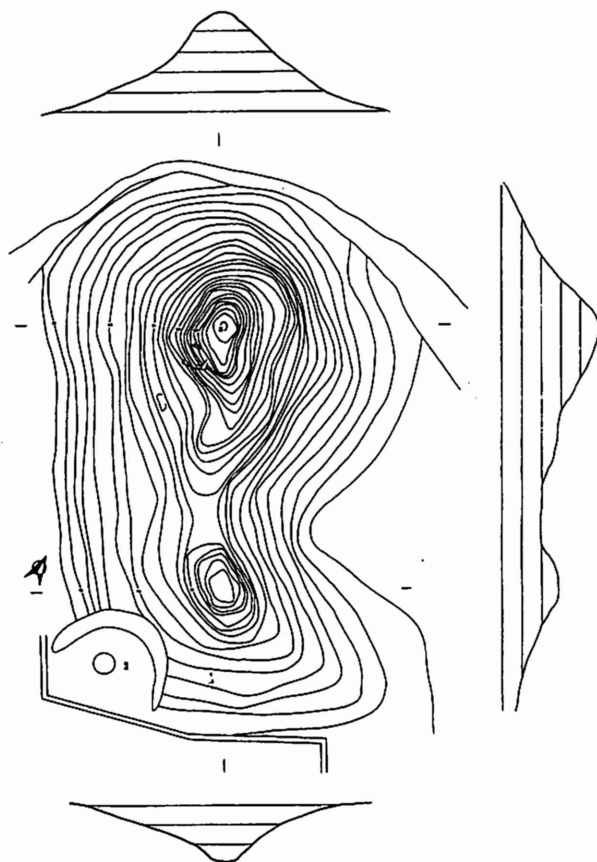
蘆嶺山脈の北側にあたり、全羅北道に位置する。現状では韓半島最北の前方後円墳である(崔完奎 2001)。報告(崔完奎・金鍾文・趙圭宅 2000)によれば、全長55m、後円部直径38.4m、前方部幅30.8mで、高さは後円部10.3m、前方部5.7mである。ほぼ南北方向にのびる丘陵の尾根上に地形を利用して築かれている。

現況は藪で覆われていて、難しいところもあるが、以下のように観察した。

後円部は後世の改変を受けているようで、本来の形を残していない。現状で観察する限りでは、墳頂平坦面はない。後円部の残された形状から見ても、墳頂平坦面はあったとしてもきわめて狭いものであったと思われる。後円部墳丘斜面の下部は傾斜が緩やかで、上部の傾斜は急になり、墳丘の中程に傾斜変換が認められる。この傾斜変換のあたりにテラスが存在する可能性がある。墳丘測量図では墳裾から2mの高さ付近で等高線が粗になるようで、この付近がテラスである可能性が高い。

後円部墳頂やや下に、「コ」の字形に配置された石材が露出している。横穴式石室の一部で、奥壁と側壁と思われる。そうであれば本古墳の横穴式石室は南側に開口することになる。墳丘で見た傾斜変換線と開口部の高さは一致し、テラス部分と石室の入り口が一体となって作られている可能性がある。石室は墳丘内のテラスの上に築かれている。

前方部は先端の西側隅が近年の墓によって壊されており、その関連で前方部先端西側といった変形されている。墳頂平坦面はごく狭く、くびれ部から急激に高さをます。本来の形を残す東側隅では稜線を形成する。墳頂平坦面が狭く、稜線が外側に大きく広がるため、結果として前方部前端斜面が大きく広がる特徴がある。くびれ部の墳頂平坦面は狭く1人が通れる程度である。くびれ部東側の墳裾は大きくくびれるが、西側は比較的ゆるやかである。周濠は後円部西側で比較的明瞭に観察される。



第2図 七岩里古墳測量図 縮尺 1/800
崔完奎・金鍾文・趙圭宅 2000年より転載

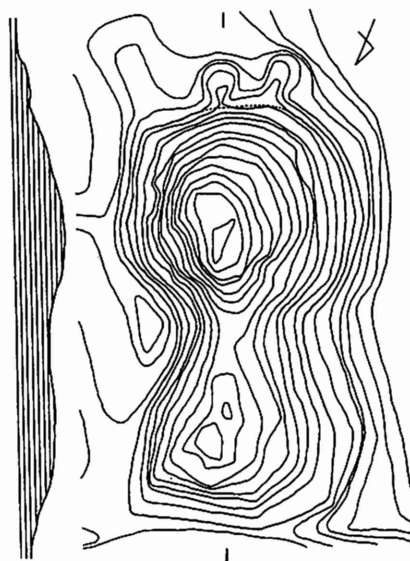
(2) 月溪古墳(月桂古墳)(第3図) 所在地 靈光郡法聖面月山里月溪村

朴天秀氏の説明によれば、七岩里古墳の南、直線距離にして4 kmの位置、大山川の水系にあるという(朴天秀 2005)。報文(林永珍・趙鎮先 1993)によれば、広い平野を眺望できる丘陵斜面に位置する前方後円墳である。長軸はほぼ南北方向で、後円部を南に、前方部を北に向ける。全長41.2 m、後円部直径22.5 m、高さ6 m、前方部長さ18.7 m、幅15.5、高さ2.5 mである。盗掘された痕跡はない。

現地は良く手入れされており、保存状態も良好である。

丘陵の高所に前方部を置き、低い位置に後円部を置くため、古墳周囲の比高は前方部が少なく、後円部が大きい形となる。後円部墳頂からは広く眺望が開ける。逆に丘陵の下から古墳を見上げた場合には後円部の高まりが強く意識されることになるだろう。後円部墳頂はやや乱されているが、現状で見れば墳頂平坦面は狭く、倭国の横穴式石室を持つ古墳の形態に類似している。後円部南側の墳裾には後世の墓が少なくとも3基は造られていて、墳丘を若干変形して

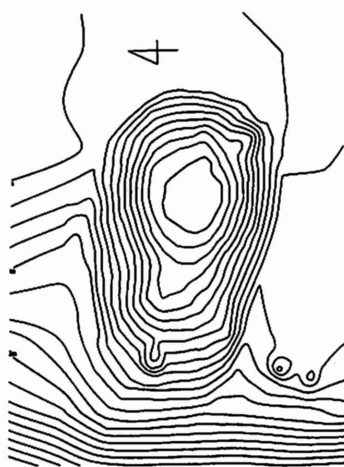
いる。前方部は先端に近づくとやや高くなるが比較的平坦である。前方部の墳頂は後円部よりも1 m程度低い。前方部前端は東隅はやや本来の形が失われているようだが、西側は稜線を形成しながら広がる。前方部前面の斜面は七岩里古墳と同じように大きく広がる特徴がある。くびれ部の墳頂平坦面の幅は狭い。墳裾でもくびれは明瞭である。東側くびれ部付近では墳端外側に窪みがあり、周濠の可能性はあるが、明瞭ではない。



第3図 月溪古墳測量図 縮尺 1/800
林永珍・趙鎮先 1993年より転載

(3) 月城山古墳 (古城里古墳) (第4図) 所在地 潭陽郡水北面古城里月城山

河岸段丘上に所在する。全体に楕円形状を呈し、長軸で24 m程度である。段丘の上に墳丘の最も高い所を置き、段丘崖にかけて細長く墳丘がのびる。前方後円墳と見た場合、前方部にあたる場所は非常に短く、墳丘最高所と比べて4~5 m程度低い位置にあたり、先端にむけて傾斜していく。くびれ部は観察できない。後円部にあたる墳丘の裾部は現代のお墓によって改変を受けている。



第4図 月城山古墳測量図 縮尺 1/800
林永珍・趙鎮先 2000年より転載

坂靖氏の理解(坂靖 2005)と同様にその可能性を否定するものではないが、現状では前方後円墳とみなす積極的な根拠は見いだせない。

(4) 月田古墳 (第5図) 所在地 潭陽郡古西面聲月里月田

水田の中に孤立した墳丘がある。全体に長方形状で後円部と前方部の高さが変わらない。後円部中央に現代のお墓がある。後円部墳頂は比較的広く、平らで削平されているとみられる。古墳の最高所はくびれ部付近で平坦な中でやや高まっているといった印象である。墳裾すべて周囲の水田耕作によって削られ、大きく変形されている。全長45 m、高さ2.3 m。墳丘北側の裾

部はやくびれており、本古墳が前方後円墳である可能性を示している。しかし、このくびれも本来のものか否か確認が必要であろう。前方部の墳頂も平坦で、広い。後円部直径と前方部幅はほぼ近い大きさである。

全体に変改が激しく、本来の形を認識するのは難しい。朴天秀氏のご教示によれば後円部から石室の用材と見られる石材が発見され、陶質土器が出土しているとのことである。墳丘周囲には周濠の痕跡かと思われる低い水田が巡っており、前方後円墳である可能性は否定できないが、認定するためには本来の形を調査で確かめることが必要であろう。



第5図 月田古墳測量図 縮尺 1/800
林永珍・趙鎮先 2000 年より転載

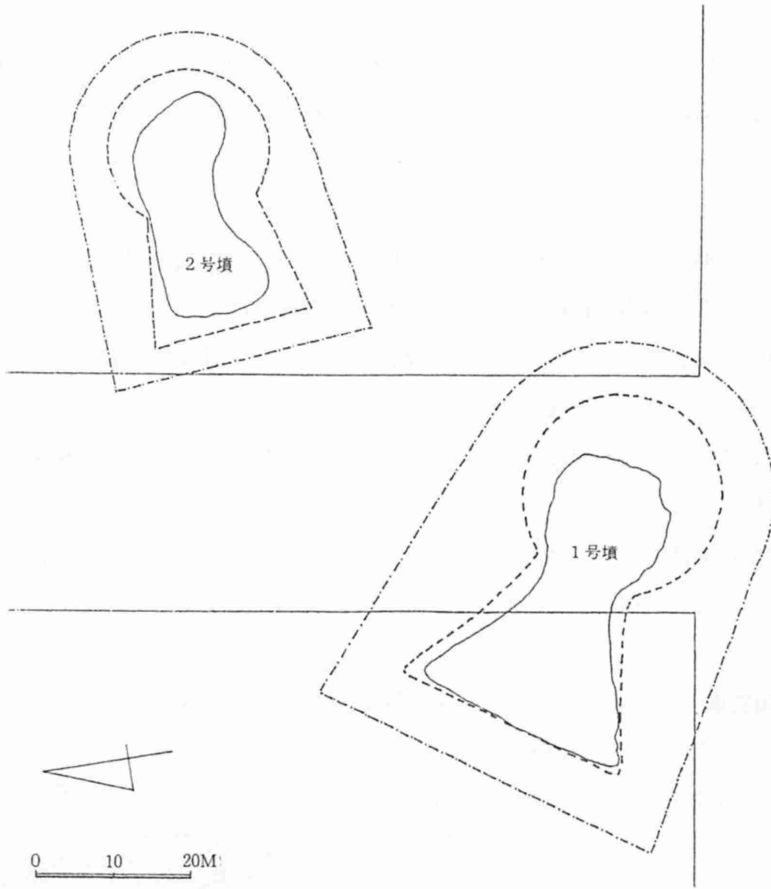
(5) 月桂洞 1号墳、2号墳 (第6、7図) 所在地 光州広域市光山区月桂洞 748

月桂洞古墳群は、前方後円墳が単独で築かれる傾向が顕著な榮山江流域にあって唯一前方後円墳 2基が連続的に存在することで知られる。

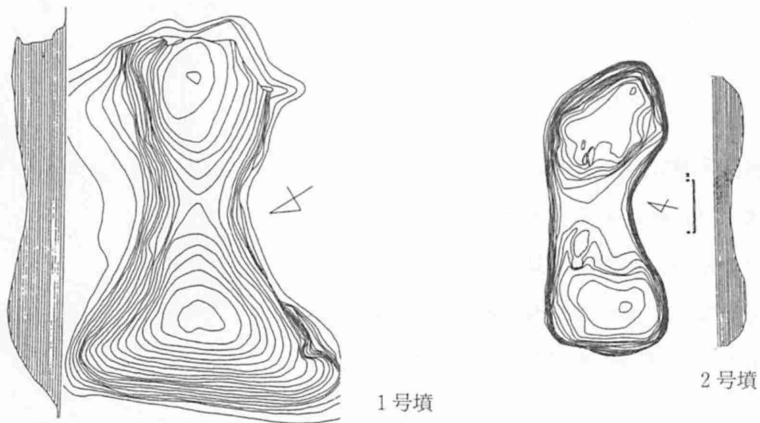
1993年に全南大学校によって試掘調査が行われ、墳丘形態、規模が確認されるとともに、埋葬施設が調査された(林永珍 1994, 1995)。林氏により報告された概要はおおよそ次のとおりである。

1号墳は、後円部を含め、大きく変改を受けているが、調査によって復元された規模は全長 45.3 m、後円部直径 25.8 m、高さ 6.1 m、前方部幅 31.4 m、高さ 5.2 m である。後円部は東に向いており、古墳の主軸は東西方向に近いが東でやや南に傾く。墳丘の周囲には盾形の周濠がめぐり、周濠内から円筒形土器と埴輪形木製品が出土した。深さは 1.5 m 前後である。後円部には横穴式石室が確認された。石室の方向は主軸に対してやや傾き、後円部墳丘南西側に開口する。石室は墳丘裾より 1.6 m の高さで墳丘内に構築されている。石室の上部は遺存しなかったが、羨道部は天井部まで全体が、玄室は奥壁、左右側壁、前壁、床面が遺存していた。両袖式の横穴式石室で玄室は長方形を呈し、割石積みである。墳丘の周囲には盾形周濠がめぐり、周濠内からは円筒形土器と石見型盾形埴輪形の木製品、笠形木製品が出土した。

2号墳は1号墳よりもさらに大きく壊されていて、墳丘は残るが本来の形ではない。周濠も多くは遺存せず、最も深い部分だけが確認された。残された周濠の最深部から周濠の形態を推定することで復元された墳丘規模は、全長 34.5 m、後円部直径 20.5 m、高さ 3.5 m、前方部幅約 22 m、高さ 3 m 程度である。後円部は東に向き、主軸は東西方向に近い。周濠は盾形で、深さ 1.0 m 前後と推定される。後円部中央に横穴式石室があり、後円部墳丘西北斜面に開口する。石室



第6図 月桂洞古墳群配置図
林永珍 1994年、1995年図面1を改変



第7図 月桂洞古墳群測量図 縮尺 1/800
林永珍 1994年、1995年より転載

は墳丘裾から1.1mの高さで、墳丘内に築かれている。石室はひどく破壊されていて、下部だけが遺存していた。1号墳と同じく両袖式の横穴式石室で玄室は長方形を呈し、割石積みである。

現在、月桂洞古墳群は復元され、史跡公園として整備されている。現状では本来の形を観察することは困難であるが、報告に示された図面を参照すると、墳丘には倭国の古墳と比べて特徴的な様相を認めることができる。

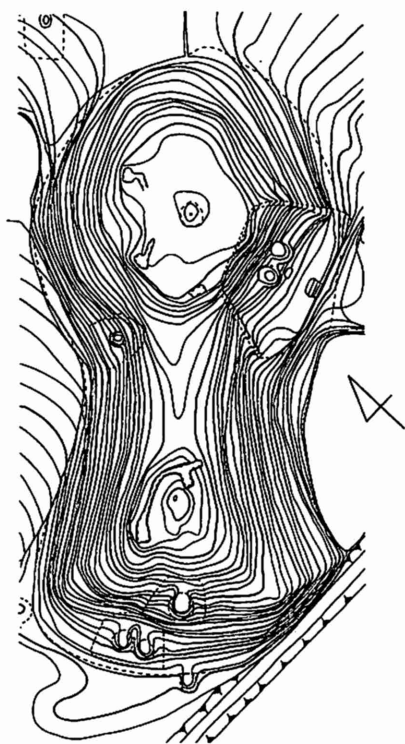
一つは前方部の形状である。比較的良く遺存している1号墳では、前方部墳頂平坦面が狭く、墳頂近くから前方部両側隅の稜線が伸びていく様子が観察される。このため、前方部前面の墳丘斜面が三角形を呈して大きく広がる姿が特徴的である。二つ目は前方部が大きく広がるのに対して、ごく狭いくびれ部が形成されることである。現状で観察する限り、くびれ部の平坦面は1人がやっと通れる程度の幅である。また、墳丘斜面の傾斜が強く、古墳規模に比べて墳丘が高いように思われる。

段築などの墳丘構造については遺存状況等の問題もあって明らかでない。石室の開口部には前庭ないしテラスなどの存在する可能性があるように思われる。

(6) 長鼓山古墳(第6図) 所在地 咸平郡咸平邑長年里長鼓山

丘陵頂部から南西に延びる丘陵上に築かれた前方後円墳である。成洛俊氏の報告(成洛俊 1993、1996)によれば、全長約70m、後円部直径36~39m高さ3.5m~8m、前方部幅約37m、高さ7m程度である。後円部は北東に向き、主軸は南北方向から後円部で東にやや振れている。後円部墳頂平坦面は楕円形で、長軸18m、短軸15mである。現在は咸平湾から2kmほど離れた場所であるが、元々は湾に面していたと見られている。

現状の古墳は下草に覆われているが、良く管理されており保存状態は良好である。復元工事が行われているとのことであるが、測量図と見比べて大きな変形があったとは思えない。墳丘は南西に延び、傾斜していく丘陵の尾根をいっばいに利用して築かれている。後円部を丘陵の高所に、前方部を丘陵末端の低い場所に置いて比較的少ない土量で大きな墳丘を作り出している。後円部墳頂平坦面は明瞭で広い。墳頂からくびれ



第8図 長鼓山古墳測量図 縮尺1/800
成洛俊1993年、1996年より転載

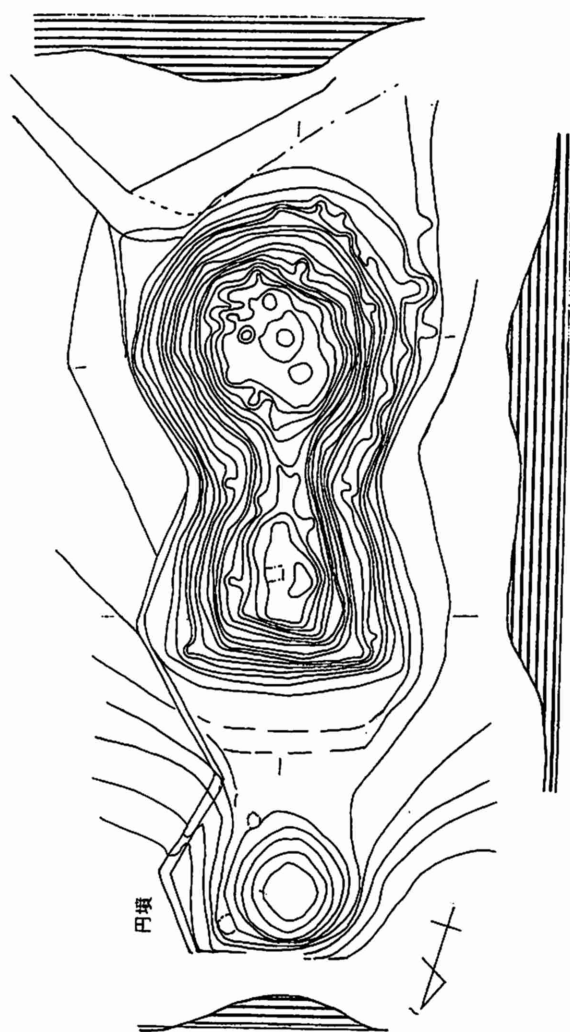
部にいたるまで、近藤義郎氏の指摘する隆起斜道(近藤義郎 2000b)が明瞭に見て取れる。くびれ部の墳頂はきわめてせまく、馬の背状である。前方部の墳頂は平坦面が狭く、前方部の隅角が狭い墳頂平坦面まで伸びるため、きわめて広い前方部前端斜面が形成される。また、前方部先端が南西方法に降る傾斜面に築かれているため、前方部の先端から墳頂平坦面との比高が大きくなり、なおさら前方部前端斜面を大きくしている。墳丘斜面の傾斜は倭国の一般的な古墳に比べてかなり急で、墳丘は高い印象を受ける。

(7) 新徳古墳(新徳1号墳)(第9図) 所在地 咸平郡月也面礼德里新徳山176~178、
月桂山19-4

新徳古墳は平坦な台地の高所に築かれた前方後円墳である。成洛俊氏の報告等(成洛俊 1992、1996)によれば、全長51m、後円部直径30m、高さ5m、前方部幅25m、高さ4m、くびれ部幅19m、高さ3.25mである。後円部を南におき、後円部から前方部に向かう主軸は南北方向からやや西に振れる。墳丘のほとんどは積み土で構成され、墳丘中段には葺石がある。墳丘周囲には溝がめぐるが、石室の羨道部前端では途切れることが確認されている。石室は後円部に主軸と直交する方向で築かれ、墳丘西側に開口する。

石室は旧地表上に墳丘築造と併行して築かれたと判断される。石室は長方形の玄室と短い羨道、それに基道で構成されている。玄室内部には棺台が設けられている。棺台及び玄室床面からは多くの遺物か出土した。

発掘調査の後は復元整備されている。本来の姿を見ることができないため、詳細な観察は難しいが、後円部、前



第9図 新徳古墳、2号墳測量図
成洛俊1992年、1996年より転載

方部ともに墳頂平坦面が明瞭に造り出されている様子は見て取ることができる。また、現況では観察されないが、測量図では墳丘の中程を境に下部が傾斜が緩く、上部が急にであるように思われる。墳丘の中段にテラスがある可能性があるのかもしれない。

(8) 明花洞古墳(第10図) 所在地 全羅南道光州広域直轄市光山区明花洞 170-5

明花洞古墳は1993年、1994年の2回にわたって調査され、朴仲煥氏によって報告されている(朴仲煥 1996)。その成果によれば、全長33mの前方後円墳で、後円部、前方部ともに大きく変形されており、本来の墳丘の姿をとどめていない。緩やかな傾斜面に築造されており、後円部を南側の低い位置に置く。墳丘の遺存状態が悪く、主軸は明瞭ではないが、後円部から前方部への方向は北でやや西に振れるようである。横穴式石室の基底部分が発見された。遺存状態が悪く、全体の形状は把握できない。玄室は長方形を呈し、くびれ部の方向に開口するようである。墳丘の裾部には円筒形土器が据えられた状態で列をなして発見された。墳丘の周囲には前方部先端を除いて周濠がめぐり、周濠の幅は広くはないが、くびれ部でも周濠外周のラインは直線的に延び、盾形の周濠を形成している。周濠内からは多くの円筒形土器が出土した。墳丘外周部には円筒形土器がめぐっていたと見られる。



第10図 明花洞古墳測量図 縮尺1/800
朴仲煥1996年より転載

古墳は埋め戻された状態で残されている。墳丘の損傷が激しく、形状を観察することは困難であるが、墳丘斜面が長鼓山古墳などのと比べて緩やかであること、前方部の先端は自然の尾根筋に直交する溝を掘ることで、前方部の先端を造り出している様子が見て取れた。また、報告書の全景写真(79頁原色図版1)では、円筒形土器が据えられている位置が墳丘斜面の傾斜変換点にあたり、円筒形土器の外側から周濠斜面の始まりまでの間にわずかな平坦な面があるようにも見え、柳沢一男氏が想定するように(柳沢一男 2002)墳丘にテラスがめぐり、周濠がめぐり、周濠内からは多くの円筒形土器が出土した。墳丘外周部には円筒形土器がめぐっていたと見られる。

ある。もしそうだとすれば、倭国の前方後円墳の墳丘築造の一般的な方法（青木敬 2003）と同じ技術が用いられている可能性がある。

(9) 杓山1号墳（馬山里1号墳）第11図 所在地 咸平郡鶴橋面馬山面杓山

丘陵斜面に築かれた前方後円墳。周囲の円墳群とともに古墳群を形成する。発掘調査は実施されていないが、全南大学校博物館によって測量が実施され、測量図が公表されている（林永珍、趙鎮先 2000）。

1号墳は前方部を斜面の高所に、後円部を斜面の低いところに置く前方後円墳である。後円部中央と前方部に大きな盗掘坑があり、本来の墳形が乱されている。全長46m、後円部直径25m、前方部幅26mで、後円部直径と前方部幅がほぼ等しい。後円部先端は高く、墳頂には平坦面はないかあっても極めて狭い。前方部も墳頂平坦面はほとんどなく、前方部隅角の稜線はハの字状に大きく開いて延びる。そのため、前方部前端斜面が大きく形作られる。くびれ部の幅は狭く、くびれ部墳



第11図 杓山1号墳測量図 縮尺1/800
林永珍・趙鎮先 2000年より転載

頂は馬の背状である。墳丘形態は月桂洞1号墳に近い。未調査のため、埋葬部は不明である。墳丘周囲には周濠の痕跡と見られる窪みがめぐる。

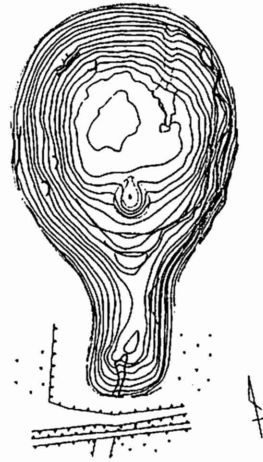
(10) チャラボン古墳 第12図 所在地 靈岩郡始終面泰潤里立石

沖積地に築かれた古墳である。1991年に発掘調査が実施された。報告書（姜仁求 1992）によれば、墳丘は前方後円形で、長軸35.6m、後円部長軸23.3m短軸20.2m高さ5m、前方部長さ12.2m幅7.4m、高さ2.25mである。後円部では攪乱をうけてはいるが、竪穴式の石室が発見され、内部から土器等の遺物が出土している。

調査者はチャラボン古墳を前方後円墳と理解し、後円部分は前方部に比べて大きいことや竪穴式石室の存在から、前方部が未発達な中期以前の段階に位置づけるが、出土遺物から後期とする見解（朴天秀 2005）も有力である。

現地は灌木や草木に覆われて観察が難しいが、前方部が低く、小さい様子は分かる。後円部の中心にはお墓があり、墳丘は削られているように見える。観察した印象は前方部があまりに

も細く、後円部墳丘に比べて低い位置にあり、前方後円墳と認識するには違和感がある。盾形の周壕が巡るといふ指摘（朴天秀 2005）もあり、前方部が大きく削られているとすれば前方後円墳の可能性はある。現状では柴山江流域の他の前方後円墳との共通点が少なく、一つの系譜で考えることに無理があるように思われる。ひとまずは、その判断を留保しておきたい。

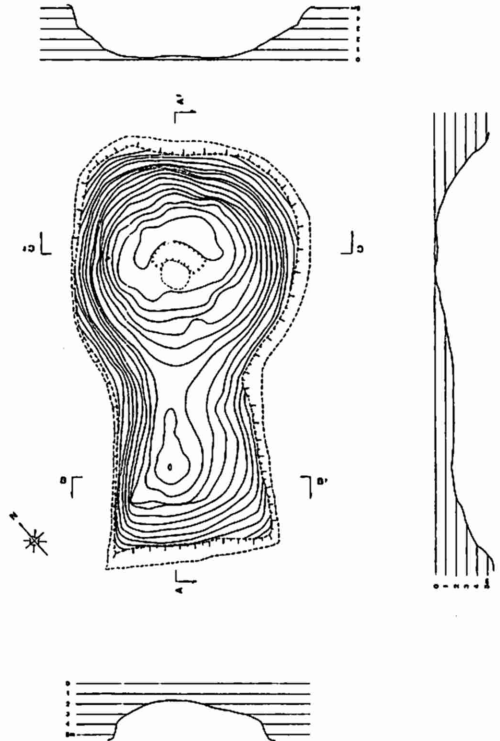


第12図 チャラボン古墳測量図 縮尺1/800
姜仁求 1992年より転載

(11) マルムドム古墳（龍頭里古墳）第13図 所在地 全羅南道海南郡三山面昌里龍頭 578

マルムドム古墳は、海南郡に所在する前方後円墳の一つである。比較的平坦な台地上のゆるやかな傾斜面に築かれている。1986年に測量が実施され、その成果が公表されている（姜仁求、李熙敦、具滋奉 1992）。その成果によれば、全長40.5m、後円部直径23m、高さ5.1m、前方部長さ19m、幅16.7m、高さ3.3である。未調査で、かつて地元の人によって掘られたことがあるが、なにも出なかったという。

現況は、畑の中にあり、古墳の墳裾は畑の開墾によって削られており、本来の形を残していない。後円部の墳頂には明瞭な平坦面はなく、丸みを帯びている。墳頂の形から見て横穴式石室の可能性が高いと思われた。前方部は比較的平坦で、比較的まっすぐにのびる。前方部墳頂は後円部墳頂より明瞭に低く作られている。

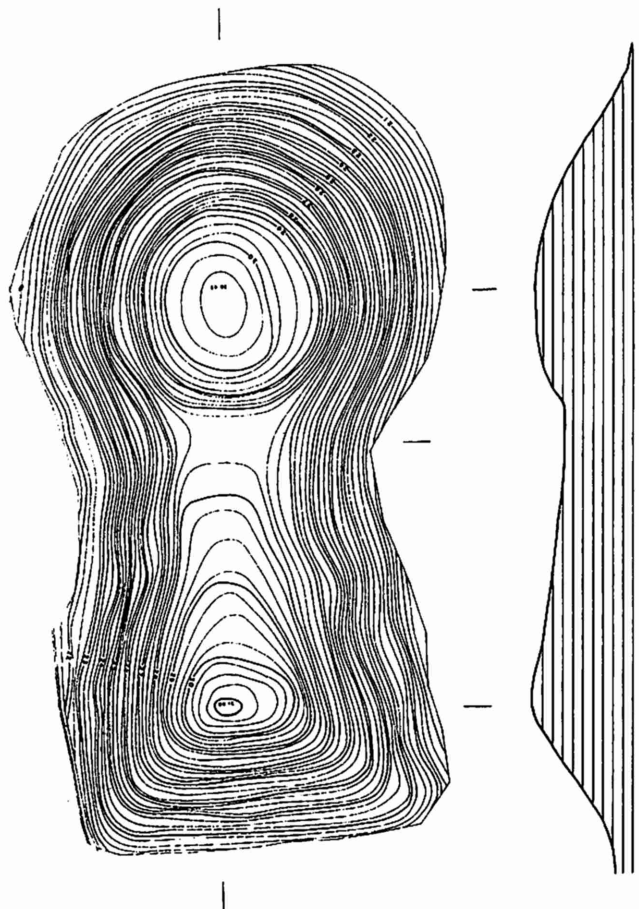


第13図 マルムドム古墳測量図 縮尺1/800
姜仁求・李熙敦・具滋奉 1992年より転載

(12) 海南長鼓峰古墳（海南長鼓山古墳、新芳古墳）第14図 所在地 全羅南道海南郡北日面方山里

柴山江流域で最大の前方後円墳で、最も南に位置する。海に近く、現在の海岸線から約2 km 離れているが旧地形では海がより内陸に入り込んでいたと言われる。1985年に測量が実施され、2000年には後円部の陥没部の性格を確認するための試掘調査が行われた（殷和秀、崔相宗 2001）。報告によれば、古墳は北から南に延びる丘陵の尾根いっばいに築かれている。丘陵は北から南に向かって傾斜しており、前方部を北の高い位置に、後円部を海よりの低い位置に置く。全長約76 m、後円部直径43 m、高さ10 m、前方部幅37 m、高さ9 mである。後円部墳頂は盗掘されており、盗掘坑の試掘調査で横穴式石室が確認されている。石室の奥壁は後円部の中心よりやや南にあり、墳丘主軸と直交してのび、後円部墳丘の西側に開口する。石室の基底は墳丘基底より5 m高い位置にあたる。墳丘斜面は急傾斜で、前方部で最大36度、後円部で最大35度を計測する。

現地での観察でも、報告で指摘されているように墳丘の傾斜が倭国の古墳に比べて急であることは明らかだった。後円部の高さと前方部の高さはほぼ同じで、最大の特徴は前方部の先端が急激に高まり、前方部前端斜面と急角度を形成していることだろう。前方部前面斜面は墳丘が高いこともあって広く、三角形の斜面を形成する。海からは前方部の特徴的な広い斜面が見えることになる。墳丘の下部は地山削り出しかもしれない。



第14図 海南長鼓峰古墳測量図 縮尺1/800
殷和秀・崔相宗 2001年より転載

小 結

以上柴山江流域の前方後円墳の様相を確認してきた。判断を保留した潭陽月城山古墳、潭陽月田古墳、霊岩チャラボン古墳のぞく10基を前方後円墳であると考えた。これらの古墳には調査の進んだものと未調査のものがあり、今後さらに検討が必要であるが、墳丘が前方後円形であることの他にも以下のような共通点が認められた。

- ① 墳丘内に埋葬施設が複数存在しない。
- ② 確認されている埋葬施設はすべて墳丘内にあり(地上式)、チャラボン古墳を保留とすればすべて横穴式石室である。
- ③ 倭国の円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪によく似た円筒形土器を持つものがある。
- ④ 墳丘周囲を調査した古墳では周濠が発見されている。
- ⑤ 海南長鼓峰古墳をのぞいて前方部から後円部にむけて隆起斜道が見られる。
- ⑥ 前方部が先端に向かうにつれて高くなる。
- ⑦ 後円部、前方部ともに墳頂平坦面が認められるものがある。
- ⑧ テラスが認められるか可能性を持つものがある。

3. 柴山江流域前方後円墳と在来墳墓群との比較

柴山江流域前方後円墳に見られる共通点のうち、②～④は柴山江流域の在来の墓制の中にも見られる要素である。吉井秀夫が紹介し(吉井秀夫 2002、2003)、他の研究者も周知しているように、この地域は朝鮮半島の中でも特徴的な墳丘内に甕棺を埋納する墓制が展開する。前方後円墳の築造をさかのぼる5世紀以前の段階から円形や長方形の墳丘墓が営まれ、その内部には複数の甕棺が埋納される。

また、それぞれの前方後円墳の近くに在来の系譜の墳墓が営まれている様相は朴天秀によって詳細に検討されている(朴天秀 2005)。その代表的な例として羅州伏岩里古墳群3号墳や羅州潘南古墳群新村里9号墳などがある。

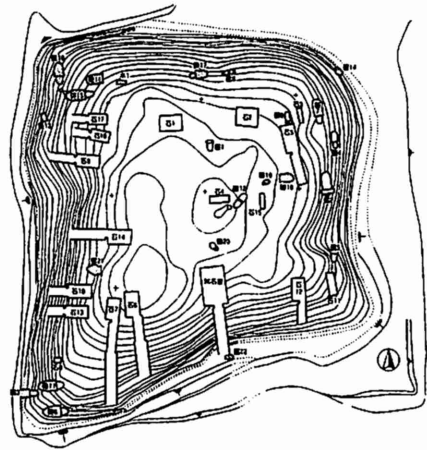
伏岩里3号墳は全南大学校と国立文化財研究所により調査が行われ、大型甕棺が埋納された横穴式石室が発見されたことで知られている。その後全面調査が行われ、横穴式石室、甕棺など総数41基の埋葬施設が確認された(第15図)。墳丘は一辺が40mを越える程度の方形であったと考えられている(金洛中 2002)。埋葬施設群は3時期に区分される。最古段階は方形台状の墳丘が築かれる以前の段階で甕棺12基、木棺1基が確認され、さらに多くの埋葬施設の存在が予想される。第2段階は最大の96石室が築かれ、封土が盛られた後に石槨、石室の築造と合わせて方形台状の盛り土が行われる。最後が方形台状の盛り土を切り込んで横穴式石室な

どの埋葬施設が設置される段階である。横穴式石室を埋葬部とすることでは前方後円墳と共通するが、方形台状の墳丘形態をはじめ、一つの墳丘に多数の埋葬施設が営まれ、墳丘が埋葬の追加に応じて積み上げられていくことなどは前方後円墳とは埋葬の原理を異にしていることを良く示している。

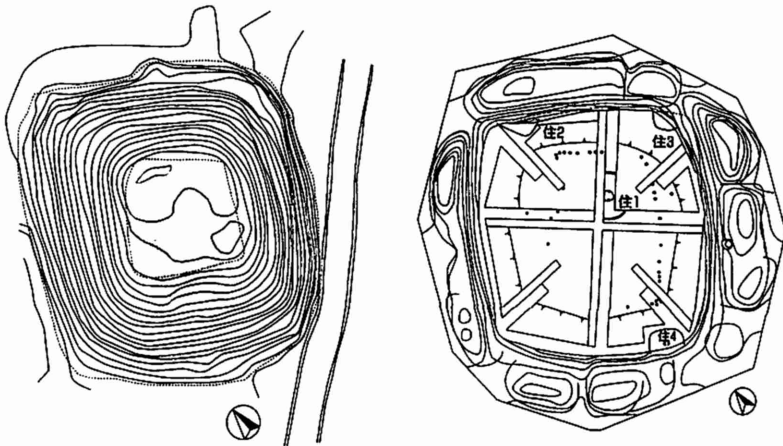
一方、金銅製冠が出土したことで著名な潘南古墳群新村里9号墳は、墳丘はやや不整な方形で南北34m、東西31m、高さ5mの大型墳墓である(第16図)。古くは谷井濟一、有光教一によって調査され、日本の墓制との関係が論じら

れた。その後の全南大学校博物館、国立文化財研究所によって発掘調査が実施され、栄山江流域に特徴的な甕棺を埋納する墳丘をもつ墳墓であることが明らかにされた(金洛中 2002)。発掘調査の結果、新村里9号墳には少なくとも一度は二次埋葬に伴って墳丘が積み増されていることが判明している。墳丘の内部に多くの甕棺が埋納されており、埋納の増加に伴って墳丘が積み増され、結果として高い墳丘が形成されている。なお、下層の甕棺に伴う一次墳丘上面の外周部に円筒形土器が配置されていたことが判明している。

伏岩里古墳群や潘南古墳群などの代表される在来の甕棺を埋葬部とし、墳丘をもつ墳墓群は、埋葬部を地下ではなく、積み上げられた墳丘の中に構築する点では前方後円墳と共通する要素



第15図 伏岩里三号墳 縮尺1/800
金洛中 2002年図3より作成



第16図 潘南古墳群新村里9号墳 縮尺1/800
金洛中 2002年図1より作成

が認められる。また、円筒形土器の存在や横穴式石室の構築も前方後円墳の持つ要素と同じである。しかし、この両者には墳丘の形態や横穴式石室と甕棺の違いに加えて、埋葬の追加に応じて墳丘が積み増されていく墓と築造当初から原則として一つの埋葬に一つの定型化した墳丘を対応する墓という根本的な原理の違いが認められるのである。このため、甕棺を埋納する墳墓の墳丘は、常に変化していくものであり、定型化しないし、墳丘が儀式の場などの意味を持たないため、形状が一定しない。甕棺墓の墳丘は埋葬部を覆うという目的のために積み上げられるのだろう。この点でも前方後円墳のあり方と大きな違いがある。

一方、熊津・泗沘都邑期の百済の墳墓は横穴式石室を埋葬部とする点で前方後円墳と共通する。しかし、百済の墳墓に用いられる宋山里型石室、陵山里型石室などと柴山江流域の前方後円墳に用いられる横穴式石室とは石室の平面、立面の構造に明瞭な違いが認められる。何よりも百済の石室が斜面を利用して墓壙を掘削し、その内部に石室を納める点に特色がある。

これは吉井秀夫が指摘するように(吉井秀夫 2002)、横穴式石室構築終了後に墳丘を構築することを意味する。この点で百済の墳墓は墳丘内に石室を置く柴山江流域の前方後円墳とは墳丘の構築過程、ひいては埋葬儀礼の時系列的な展開の原則に違いがあると言えよう。この原則の違いは葬送を営む人々の死生観を反映したものと想定されよう。

また、百済の墳墓の墳丘に企画性を明瞭に読み取ることは難しい。これは百済の墳墓の墳丘はあくまでも石室を覆うことを目的としたもの(李盛周 2000)であり、外形に大きな意味を持たないためであろう。この点でも柴山江流域の前方後円墳と百済の墳墓群とは本質的な違いが認められるように思われる。

小 結

柴山江流域の在来の墓制の中には、① 墳丘内に埋葬施設を置き、② 横穴式石室を埋葬部に持つことや③ 墳丘外周に円筒形土器をめぐるなど、倭国の前方後円墳に共通する要素が認められる。しかし、同一の墳丘内に多数の埋葬が認められ、甕棺埋納の進行につれ、墳丘が積み増されることなど従来の葬送の考え方が一貫して保持されている。甕棺墓制に見られるこれらの要素のうち、① は従来の伝統が倭国の前方後円墳と共通していたと見られ、②、③ は倭国の前方後円墳の体系のうちの一部が従来の墓制に取り入れられたものと考えられる。そのことは伏岩里三号墳 96 石室で新たに受容した石室に大型甕棺が埋納されたことに良く示されている。

一方、熊津・泗沘都邑期の百済の石室墳は横穴式石室を唯一の埋葬部とし、墳丘を持つ点では柴山江流域の前方後円墳と共通性が高い。それぞれの横穴式石室の系譜については諸説あるが、ここでは両者の構造が異なっており、系譜を異にする横穴式石室であることを確認したい。

また、前者が原則として地下に石室を構築し、死者を地下に埋葬することを意識し、墳丘は埋葬部を覆うことに主たる目的があるのに対して後者は地表の上、墳丘内に死者を埋葬し、埋葬に関わる舞台としての意味をもつため、墳丘が定型化し、墳丘平坦面を持ち、テラスを構築する場合があるなどの特徴がある。この意味で熊津・泗沘都邑期の百済の石室墳と柴山江流域の前方後円墳とは葬送の原則に大きな違いがあり、両者の間に系譜上の関係は認められないと考えられる。

4. 柴山江流域の前方後円墳と倭国の前方後円墳

柴山江流域前方後円墳の墳丘が前方後円形であることの他に見られる共通点は先に ①～⑨まで挙げた。

これらのうち ① から ③ は倭国の前方後円墳の時期的な特徴に符合する。すなわち、倭国内の前方後円墳では竪穴系の埋葬施設を持つ古墳の場合には主たる埋葬施設の他に前方部などに副次的な埋葬施設を持つ場合も多い。しかし、横穴式石室を持つ古墳では多くの場合埋葬部が横穴式石室に限られる。また、石室が構築される位置は墳丘内であり、古い時期には墳丘の比較的高い位置にあり、時代が新しくなるにつれて下がり地表面上に石室が築かれる例もある。しかし、地表下に石室が構築される例は知られていない。③ の円筒形土器は倭国の円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪にあたる。これも円筒形土器の形態から見て中期から後期の特徴である。これらの共通点は倭国の前方後円墳の変遷の中で中期から後期の様相と一致するものである。

一方、④ から ⑧ の特徴は倭国の前方後円墳に特有の考え方との関係を示す要素である。近藤義郎氏が説くように(近藤義郎 2000a、2001)、倭国の横穴式石室導入以前の前方後円墳は、埋葬に関わる一連の行為が執り行われるための場として築かれている。すなわち、葬送の列は前方部の両隅角の内、傾斜の緩い方を登り、前方部先端の高まりから緩い傾斜をもつ前方部墳頂平坦面を下り、再び隆起斜道を通して後部墳頂平坦面に至り埋葬の儀式が執り行われると考えるのである。柴山江流域の前方後円墳は横穴式石室を埋葬施設とするものであるから、墳頂に墓道としての前方部平坦面や隆起斜道は不要であるのだが、多くの古墳でそれが実現している。このことは、柴山江流域の前方後円墳は倭国の前方後円墳を形だけ模倣したものではなく、葬送の一連の行為が執り行われる場として、作り出されており、倭国内で前代から受け継がれた考え方や名残までも継承していることを示しているのであろう。すなわち柴山江流域の前方後円墳は倭国の5～6世紀の前方後円墳の様相を体系的に実現したものと言えよう。この点で、倭系の要素が在来の墓制に部分的に取り入れられていることとは一線を画して理解する必要があると考える。

5. 栄山江流域の前方後円墳の築造をめぐる

(1) 墳丘の形態

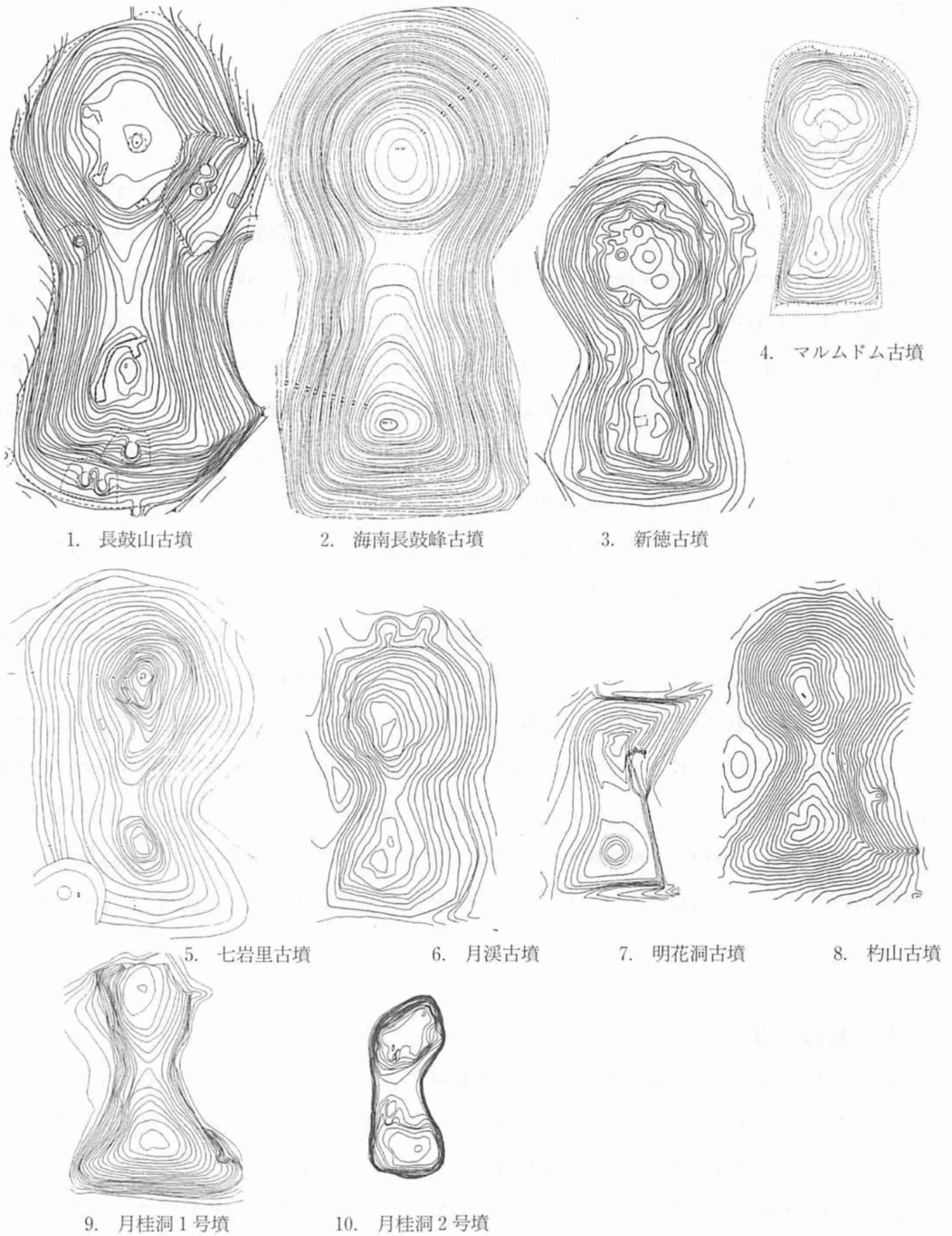
栄山江流域の前方後円墳の墳丘形態は多様だが、おおまかに A 後円部墳頂に比較的広く、明瞭な平坦面をもつグループと B 後円部墳頂に明瞭な平坦面を持たないグループに分けられそうである（第 17 図）。

A グループには咸平長鼓山古墳、咸平新徳古墳、海南マルムドム古墳、海南長鼓峰古墳がある。A グループには前方部に墳頂平坦面を明瞭に作り出すものがあり、前方部が比較的直線的にのびる特徴がある。また、海南マルムドム古墳や咸平新徳古墳などは前方部が後円部よりも明瞭に低く作り出す。このような特徴は、一般的には倭国の前方後円墳の相対的に古い要素に共通し、相対的な時間差を示す可能性がある。

A グループの 4 基の前方後円墳には共通する要素がある一方でかなりの違いも認められる。海南長鼓峰古墳には前方部から後円部にいたる隆起斜道が存在しないことや、海南長鼓峰古墳、咸平長鼓山古墳の前方部が後円部に比べて長大であることなどが個別の違いだが、墳丘の全体的な形状にも違いが見て取れる。A グループの古墳には共通の設計といった細部まで一致するような様相を認めることは困難であるようだ。これらの古墳はちょうど倭国周縁域、東北地方における出現期の古墳の様相と同じように、それぞれの古墳が個性的である。東北地方の前期古墳が個性的である理由は、古墳の築造にあたって、古墳築造の主体者が自らの持つ情報や政治的な関係のもとに、必要に応じて古墳築造に関わる技術者を受け入れながら墳丘や埋葬施設を作り上げていくからだと考えている。A グループの古墳築造にも類似した状況があるのかもしれない。

一方、B グループには高敞七岩里古墳、靈光月溪古墳、光州月桂洞 1 号墳、2 号墳、光州明花洞古墳、咸平杓山 1 号墳がある。B グループの各古墳には後円部墳頂に平坦面を持たないという共通点の他にもいくつかの特徴がある。一つは前方部に平坦面を持たず、前方部先端の墳頂が高まるため、前方部隅角の稜線が八の字状に開き、明瞭で長い点である。このため、前方部前端の斜面は大きな三角形を呈しきわめて特徴的である。もう一つは、くびれ部が狭く、前方部が大きく開くことである。月桂洞 1 号墳が典型的な例だが、墳丘が乱されている高敞七岩里古墳、靈光月溪古墳、光州明花洞古墳も本来は同様の形であったと見る事が可能である。

この B グループの墳丘構造の共通性はかなり明瞭であり、なおかつ類似度が高い。近年倭国内の九州地方、四国地方、東北地方などの周縁域の古墳の中に極めて類似度が高い特徴的な一群が知られるようになった。古墳時代前期では、北条芳隆氏が指摘した讃岐型前方後円墳（北条芳隆 1999）や宮崎県西都原古墳群の前方部が細く長い一群、古墳時代中期後半では東北地



第17図 柴山江流域前方後円墳分類図 縮尺 1/1,000
 1~4 Aグループ
 5~10 Bグループ

方南部、仙台平野から胆沢平野にかけて分布する前方部が低く、短い前方後円墳(藤沢敦 2001)などがその例である。このような共通性が生じる理由は、地域の中に古墳のあり方のモデルが共有されているためと考える。栄山江流域のBグループを築いた人々や地域の中で同様に同じ前方後円墳像が共有されていた可能性を考えたい。

ところで、栄山江流域の前方後円墳には、グループの違いを超えて共通する特徴として、墳丘斜面が急傾斜であることが挙げられる。海南長鼓峰古墳はその典型的な例で、前方部斜面で最大36度にも達する。海南長鼓峰古墳の報告書(殷和秀、崔相宗 2001)が指摘し、報告書カラー図版16にも見られるように、このような墳丘斜面の急傾斜は、積み土を版築状に突き固める技術によって実現されている。この技術は岡内三眞氏(岡内三眞 1996)や青木敬氏が指摘するように(青木敬 2005)伝統的な墳丘墓や横穴式石室墓の墳丘構築に用いられるもので、前方後円墳の墳丘構築にあたって多くの在来の技術が用いられたことを示している。前方後円墳の構築にあたって、在地の人々が深く関わっていたことを示すものであろう(註2)。ただし、光州明花洞古墳の墳丘は、墳丘の外周部に土手状に土を積み、中に土を流し込んで墳丘構築技術が採用されている。青木敬氏が「西日本の工法」と呼ぶこの技術(青木敬 2003)は倭国の伝統的な墳丘構築技術の一つであり、明花洞古墳の墳丘築造にあたって、外形からはうかがい知ることができない倭国の技術を知る人物が参加したことが想定される。

なお、栄山江流域の前方後円墳は、丘陵上に築かれる場合に下り斜面が選ばれ、墳丘の主軸を斜面の傾斜の方向と一致させる傾向がある。咸平長鼓山古墳や海南長鼓山古墳が典型的な例で、後円部を高く置か低く置かかの違いがあるが、沖積地から見上げた場合、前方後円墳の全体の姿ではなく、後円部か前方部のいずれかの大きな姿だけが見えることになる。倭国の前方後円墳が主として側面から、つまり前方後円の全体の姿を見せることを意識していることと対照的で、一つの特徴と見ることができよう。

(2) 横穴式石室

栄山江流域の墳墓、前方後円墳で横穴式石室が採用されていることはよく知られている。その系譜については諸説あるが、筆者は、栄山江流域に分布する石室に立柱石、榎石からなる玄門構造、玄室下部の腰石などの特徴的な属性が共通する点を認め、栄山江型石室と名付けるとともにその系譜を北部九州に認める柳沢一男の見解(柳沢一男 2002、2003)に従いたい。柳沢はさらに栄山江型石室を五つの類型に分け、そのうちの造山類型、新徳類型、鈴泉里類型を北部九州との直接関連型、長鼓峰類型、月桂洞類型を在地発展型とし、前者を源流地からの直接移入、後者を在地工人による築造と解釈した。

先の墳丘によるグループ分けとの関連では、Aグループの咸平新徳古墳が北部九州との直接

関連型になり、光州月桂洞 1、2 号墳が在り発展型に相当する。A グループの前方後円墳は、古墳築造の主体者が自らの持つ情報や政治的な関係のもとに、必要に応じて古墳築造に関わる技術者を受け入れながら墳丘や埋葬施設を作り上げていくと考えており、柳沢の石室の理解と良く符合する。

一方、B グループでは、前方後円墳築造の主体となる人々の間では、古墳のあり方のモデルが共有されていると考えた。石室が在り発展型と考えれば、B グループには在りで作り出された石室が伴うことになる。B グループには墳丘のみならず石室に関わるモデルとそのモデルを実現するための技術が伴う可能性がある。

残念ながら、両グループともに石室の全体像が明らかにされた例が少なく、A、B いずれのグループにしても現段階では推測にすぎない。調査例の増加を待って墳丘と石室の関係を再度検討する必要がある。

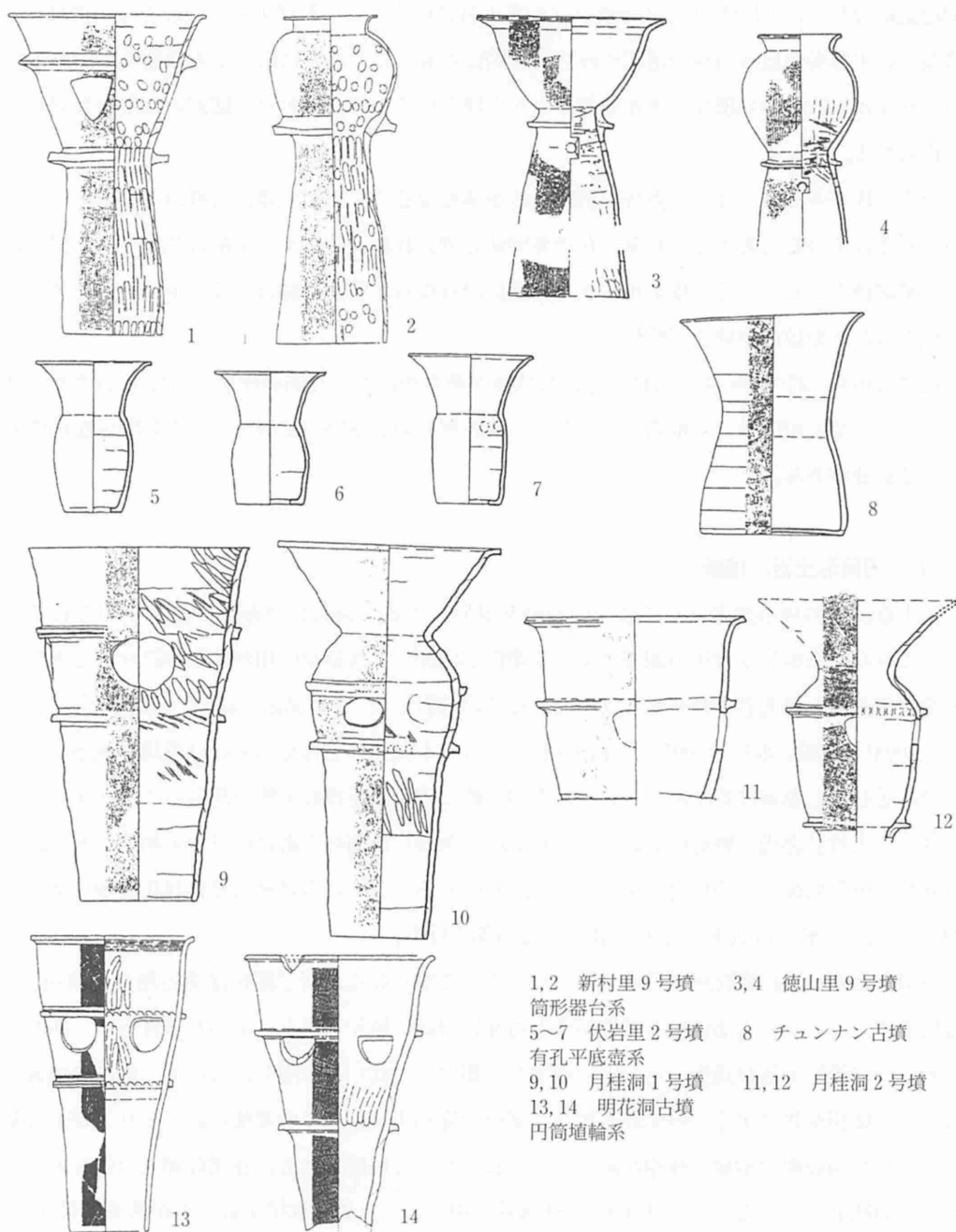
(3) 円筒形土器、埴輪

栄山江流域の倭系要素として倭国の埴輪を祖形とする土製品が分布することが知られている。これらの土製品は近年の調査によって類例が増加し、複雑な様相が明らかになってきたことを踏まえて、研究者それぞれの立場によって円筒形土器（大竹弘之 2002）、埴周土器（林永珍 2004）、埴輪（坂靖 2005）と呼称されている。本稿では名称そのものに系譜や性格の理解を含み込むことを避けるために、いったん中立的な円筒形土器の名称を用いることとする。

さて、大竹弘之氏の整理によれば（大竹弘之 2002）円筒形土器には三つの類型がある。大竹分類の円筒埴輪系、筒形器台系、有孔平底壺系である。これらはそれぞれ林氏分類（林永珍 2004）の筒 B 形、筒 A 形、壺形に相当する（第 18 図）。

筒形器台系は羅州新村里 9 号墳で出土したことで知られるが同じ羅州潘南古墳群の徳山里 9 号墳で出土し、同じく徳山里 8 号墳からも可能性の高い破片が出土している（林永珍 2004）。これらの円筒形土器は筒形の台の上に壺または器台（円筒）を表現したもので、倭国の埴輪とはかなり様相を異にする。いずれも墳丘に甕棺を埋納する墓制の中で使われており、在来の墓制の中に倭国起源の埴輪の様相が取り入れられたものと理解される。在来の葬送の体系の一部としての機能を担ったために、倭国の葬送儀礼の中にあつた姿を維持する理由が希薄になり、大きく変形されたのだろう。

有孔平底壺系については九州の壺形埴輪に祖形を求める考え（小栗明彦 2000、2002）があり、日本列島の影響を認めつつ在りの平底壺との関係を考える立場（大竹弘之 2002）がある。羅州伏岩里 2 号墳、咸平チュンナン古墳などから出土している。いずれも在来の墳丘墓に用いられたもので、墳丘の周囲に立て並べる点では倭国の埴輪の系譜につながるものだろうが、筒



1, 2 新村里9号墳 3, 4 徳山里9号墳
筒形器台系
5~7 伏岩里2号墳 8 チュンナン古墳
有孔平底壺系
9, 10 月桂洞1号墳 11, 12 月桂洞2号墳
13, 14 明花洞古墳
円筒埴輪系

第18図 柴山江流域の円筒形土器 林永珍2004年より転載

形器台系と同様に在来の墓制の一部として存在し、使われ続けたと考えられる。その意味で倭国の埴輪とは担う機能が異なっていると見られる。有孔平底壺系は前方後円墳出現以前に存在するようで、前代の倭国とこの地域の交流の中で相互の影響関係のもとに生み出されたものであろう。

円筒埴輪系は光州明花洞古墳、羅州月桂洞1、2号墳から出土している。名称の通り倭国の円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪と基本的な特徴が一致している。中でも月桂洞1号墳出土資料は倭国の円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪と形態上で変わるところはない。また、月桂洞2号墳、明花洞古墳の円筒埴輪も月桂洞1号墳出土資料とはやや違いをみせるが、大筋では良く似ている。円筒埴輪の成形にあたってはタタキ技法、倒立技法が用いられている。倒立技法の存在について倭国の尾張地方の工人との関係が指摘されている（小栗明彦 1997、2000、2002）が、在地の土器製作技術との関係を考える必要があるだろう。

さて、明花洞古墳、月桂洞1、2号墳の円筒形土器はいずれも前方後円墳の墳丘周囲に立て並べられたものである。先に述べたように、筆者は柴山江流域の前方後円墳が倭国の葬送儀礼を体系的に実現したものと考えるので、この3古墳の円筒形土器はまさに倭国の前方後円墳を舞台とする葬送儀礼体系の一部を担ったものに他ならない。倭国の埴輪とその機能、性格が変わらない以上、この一群は円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪と呼ぶべきであろう。

ところで、3古墳の円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪にはそれぞれに特徴があり、型的な変遷を追えない形態上の変化を持っているし、製作技術にも個性があり、倭国の一般的なあり方とは違いを見せる。

じつは、このような様相は柴山江流域の埴輪だけに見られるものではない。例えば、筆者がフィールドとする東北地方南部においても、地域内に分布する埴輪群に型的な連続をたどれない場合がある。これは地域の中に埴輪の継続的な生産拠点が存在しないために、古墳築造にあたって、築造の主体者がそれぞれの持つ関係の中で埴輪工人を招聘し、埴輪生産を実現するためと考えている（辻秀人 1989）。極端な例では、同じ古墳群の隣り合う同時期、同規模の古墳の間でさえ、まったく別系譜の埴輪を持つ場



第19図 宮城県名取市経ノ塚古墳出土円筒埴輪
東北大学考古学研究室提供

合もある。このようなあり方は継続的な埴輪生産が行われない地域では一般的な現象である。栄山江流域の3古墳の埴輪に違いが見られる背景に、同様に古墳築造にあたって、埴輪生産組織がそれぞれの古墳ごとに組織されたことを読み取ることも可能であろう。

また、倭国内でも円筒埴輪製作に在地の土器製作技術が用いられている例もしばしば認められる。第19図は、宮城県名取市経ノ塚古墳出土円筒埴輪である。形態も典型的な埴輪とは違い、製作にも土師器の調整方法が使われている。これは埴輪製作にあたって、在地の人々が動員された結果と考えられている。栄山江流域の3古墳の埴輪の製作にあたって、埴輪工人が指導し、イメージモデルを模倣する形で在地の人々が埴輪生産にあたったため、在地の土器生産技術をもちいて円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪の姿が実現されたのだろう。

6. 栄山江流域の前方後円墳と倭国周縁域の前方後円墳

栄山江流域では、前方後円墳出現以前の段階から、在来の甕棺墓制の中に横穴式石室、円筒形土器（筒形器台系、有孔平底壺系）など倭系の要素が取り入れられている。これは倭国との長期に渡る活発な交流の結果と見られる。これに対して、前方後円墳は6世紀前半のきわめて短い時間の中で出現する（朴天秀 2005、2006）。

前方後円墳の出現は墓制の相互の影響関係の結果現れた部分的な要素の出現とは違って、倭国の前方後円墳の体系がこの地域で実現したことを意味することは先に述べた。それではこのような現象はどのような社会の動きの中で実現したものなのだろうか。

この問題を考えるための手がかりを倭国周縁域の古墳の出現の様相の中に求めることが可能である。倭国周縁域では栄山江流域と同様に、前代の墓制とまったく違った前方後円墳とその葬送の体系を受け入れているからである。ここでは、倭国の北の周縁にあたる東北地方の古墳時代前期の会津盆地の古墳出現のあり方と中期後半の前方後円墳の北限である角塚古墳の例、そして北部九州における前方後円墳出現の様相を取り上げたい。

(1) 会津盆地における前方後円墳の出現

会津盆地では、近年の古墳研究の進展により、古墳時代前期に多くの前方後円墳、前方後方墳が築造されたことが確認された。これらの中には全長100mを越える大型前方後円墳が含まれ、会津盆地内の三カ所で継続的に古墳群が営まれている。

しかし、前方後円墳出現以前の弥生社会では、古墳を築くにいたるような有力者の存在は確認できず、墓も墳丘を持つものは存在しない。つまり、会津盆地では、前代の弥生時代から前方後円墳につながる要素は存在せず、前方後円墳は突如出現するのである。

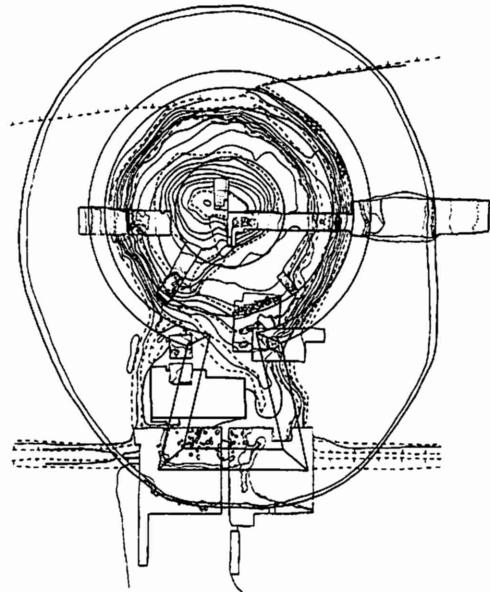
このような現象が生じた理由は人の移動にある。会津盆地では弥生時代の最終末の段階で北陸地方中でも北東部の能登地方から人の移住があり、在地の人々も含めて社会の大きな変動があった(註3)と考えられる。在地社会の変動に主体的な役割を担った北陸北東部の人々は大和王権の前段階、邪馬台国との関係を持っていて、邪馬台国を継承して成立した大和王権が前方後円墳を創り出した時に、会津盆地でも前方後円墳が築造されたと考える(辻 2003)。前代に系譜を持たない前方後円墳出現の背景に人の移動を考えるのである。

(2) 北限の前方後円墳、角塚古墳の出現

次に角塚古墳の出現の過程を見てみよう。角塚古墳は岩手県奥州市(旧胆沢町)に所在する北限の前方後円墳である(朴沢志津江、佐藤公保、辻秀人 2002)。全長46m、後円部直径32.4m、前方部長さ16m、幅17m、段築、葺石、埴輪を伴う中期古墳後半の前方後円墳である(第20図)。

角塚古墳が築かれている地域一帯は、角塚古墳出現以前の段階では、北海道の続縄文文化の生活様式が受け入れられていたと考えられている。狩猟漁労を基盤とする生活が営まれ、地面から土壌を掘り、遺体を埋納する墓が一般的であったのである(辻秀人 1996)。角塚古墳もまた、在地の伝統的な墳墓との連続性は認められず、突如在地社会の伝統とは全く違う前方後円墳の葬送体系が実現したものである。

角塚古墳の出現は、角塚古墳の北約2kmにある中半入遺跡の成立、展開と深く関係する。中半入遺跡は1998、1999年に発掘調査が実施された。その成果によると、古墳時代前期の中頃に東西南部と同様の土師器を使用する生活様式の集落が成立し、中期前半に集落は縮小するものの、中期後半には集落が拡大し、拠点的な集落となるという(高木晃他 2002)。中半入遺跡はこの地域の中では特殊な遺跡である。遺跡の周囲が続縄文文化の生活様式を営む社会であるのに対して、例外的に東西南部以西の古墳を築く社会の生活様式、つまり稲作を基盤とする社会の生活が営まれているのである。



第20図 岩手県奥州市角塚古墳 縮尺1/800
朴沢志津江、佐藤公保、辻秀人 2002年より転載

角塚古墳を築いた人々は、この中半入遺跡の人々と考えられている。角塚古墳が築かれる以前に地域の中で周囲とは違った文化を持った人々が少数やってきて暮らし始め、やがて大きな集落となったときに自らの社会が持つ前方後円墳という地域の一般的な墓とは異なる墓を実現させたのである。

(3) 北部九州における前方後円墳の出現過程

最後に、北部九州における前方後円墳の出現について考えてみたい。北部九州の弥生時代後期から末葉の墳墓は、無墳丘群集墓や方形、円形の低墳丘墓あるいは小さな突出部を持つ低墳丘墓がある（柳沢一男 1991）が、これらの墳墓には前方後円墳につながるような要素や変化の方向は認められない。一方、北部九州には、福岡県二丈町一貴山銚子塚古墳、福岡県福岡市那珂八幡古墳、福岡県苅田町石塚山古墳、大分県宇佐市赤塚古墳、佐賀県唐津市久里双水古墳など、古墳時代前期の大型前方後円墳は数多く知られている。北部九州でもまた、前方後円墳は前代の墓制との関係をもたず、突如出現するのである。

これに対して、この地域の生活の変化はどうか。北部九州における弥生土器から土師器への変換はきわめて緩やかに行われる。すなわち、大和を中心とする前方後円墳を築く社会が作り上げた土師器のうち小型精製器種と呼ばれる小型丸底鉢、器台、有段丸底鉢などは早く北部九州の土器郡の中に取り込まれるが、甕、壺などの大型の貯蔵、煮炊きの器種は比較的長い時間をかけて徐々に土師器的な要素を取り入れていくのである（辻秀人 2000）。このような土師器の変化は、在地の社会が大きく変動していないことを示している。北部九州の弥生社会は、大和で生み出された要素を徐々に受け入れながら変容していくのである。

このような様相から見て、北部九州で突如新たな墓制である前方後円墳が登場する理由は、在地の弥生社会に大きな変動があったのではなく、在地の社会が新たな墓制である前方後円墳を受け入れたことに求められる。前方後円墳の採用は在地社会の選択であり、その選択の背景には大和王権との政治的な関係があったことは間違いない。北部九州のあり方は、在地社会が在来の墓制に変わって新たな墓制を受け入れる一つのモデルとして理解されよう。

(4) 栄山江流域の前方後円墳出現をめぐる

これまでの検討で、栄山江流域の前方後円墳は、在来の墓制の系譜とは異なり、倭国の5～6世紀の前方後円墳の様相を体系的に実現したものと考えた。このような前方後円墳の出現をどのように考えることができるのだろうか。

周知のように、栄山江流域前方後円墳の被葬者については種々議論されてきた。在地の首長とする考え方は朴淳発氏（朴淳発 2002）、柳沢一男氏（柳沢一男 2002）、田中俊明氏（田中

俊明 2002) などによって示されてきた。他に、この地域に移住した倭系の集団とする説(東潮 2002) や倭国に渡り、倭国の政治的な変動の中で柴山江流域に亡命した馬韓勢力とする説(林永珍 2005)、倭系百済官僚説(山尾幸久 2002)、倭王権と百済に両属する複数の九州勢力と見る説(朴天秀 2005、2006) などがある。

筆者はこれらの見解のいずれに妥当性があるかを判定することはできないが、先に述べた東北地方の会津盆地や胆沢平野、北部九州など倭国周縁域の前方後円墳の出現のあり方をモデルにこの問題を考える手がかりが得られるのではないかと考える。

すなわち、会津盆地のモデルのように、人の移動による社会の激変が前方後円墳出現の背景にある場合には、前方後円墳以外の要素、たとえば集落の様相、土器の変化などに、在地社会の変化が反映すると考えられる。一方、北部九州のように在地の人々が政治的な判断のもと、前方後円墳を受け入れるという選択をした場合には、在地社会の変化は比較的緩やかで、倭系の要素と在地の伝統は融合して新しい形を作り出していくことになるだろう。また、胆沢平野の角塚古墳のように在地社会の中に一部倭系の人々が存続していた場合には、明らかに周囲とは違う様相を持つ集落が存在することになるだろう。

現状では、柴山江流域の集落や一般の墳墓の様相が十分に明らかではないため、上記のいずれの形に近いかを論ずるには資料不足である。従ってあくまで推測の域を出ないが、前方後円墳が築かれる時期あるいはその直前に、倭系の家や墓、土器をまとまって持つ集落が存在するわけではなく、また、新たな移住者によって社会の様相が大きく変わるといふ様相が見られないとすれば、在地の人々による前方後円墳築造の選択という可能性が高いのではないだろうか。必要に応じて古墳築造に関わる技術者を受け入れながら墳丘や埋葬施設を作り上げていく A グループのあり方や地域の中で同じ前方後円墳像が共有されていた可能性が高い B グループの様相、在地の技術を用いた円筒埴輪のあり方や在地の墳丘構築技術などはこのような想定と矛盾しないように思われる。

7. おわりに

本稿は、柴山江流域の前方後円墳の出現という歴史事象を理解するための道筋を追求した結果である。

考古学の立場から、このような歴史的な事象を解明するにあたって、なによりも考古学的な分析が最重要で、次に文献史学の成果と比較検討することが有効と考える。考古学的な理解と、文献史学の成果とを混在させて考えると、相互に依存した論理が構成されてしまい、それぞれの立場からの検証が難しくなる。残念ながら日本考古学には文献史学の成果によりかかった考

古学的な推論を行った結果、事実関係と整合しない解釈がながく維持されてしまった苦い研究史がある。

そこで筆者はまず、栄山江流域流域の前方後円墳について観察した結果を総合し、在来の墳墓とは葬送の体系が異なるもので、倭国の葬送儀礼を体系的に実現したものと考えた。

また、検討の対象とした10基のうち、後円部に墳頂平坦面をもつ比較的古い様相を持つAグループと栄山江流域に特徴的な形態を持つ相対的に新しい要素を持つBグループがあり、Aグループには九州との直接的な関連がある横穴式石室、Bグループには在地発展型の横穴式石室が伴うこと、前方後円墳に伴う埴輪は、倭国の埴輪を体系的に実現したものであるが、その製作にあたっては在来の土器生産技術が用いられていることなどを述べた。

次に、このような事実関係を踏まえて、栄山江流域の前方後円墳出現を考える道筋として、栄山江流域と同じく、前代の墓制の伝統とはまったく異なる前方後円墳の葬送儀礼を体系的に実現した倭国周縁域の例をモデルとする方法を採用した。

在地社会に多くの人の移住があり、新しい社会構造が形成され、前方後円墳築造に至った会津盆地、地域社会の中に違う文化をもった人々が一定の地域に集落を形成し、前方後円墳築造に至った胆沢平野、在地社会の構造は基本的に変わらず、在地社会の選択として大和王権との政治的な関係のもとに前方後円墳築造を受け入れた北部九州の三つのモデルである。これらのモデルは同じく在来の社会の伝統にない前方後円墳を築造するが、その背景の社会構造がそれぞれに違っている。

栄山江流域の前方後円墳の築造をこのようなモデルと比較検討するためには、前方後円墳だけでなく、その築造を担った社会で人の移動があったのか、移動した人数は多数か否か、在地社会は変動したのか、それとも基本構造が維持されたのかを知る必要がある。残念ながら筆者の知る限りでは在地社会の状況は十分には明らかではない。敢えて現段階で推測するとすれば、前方後円墳の築造にあたって多くは在地の伝統的な技術が用いられている様子から見て在地社会に大きな変動を認めにくいので、北部九州の状況に近いのではないかと考えている。今後在地社会の様相が明らかになるのをまってさらに検討を深めたい。

なお、人の移動を考古学的に立証するためには、遺物の分布だけではなかなか難しい、住居や一般の人々の墓などを総合的に考える必要がある。これも今後の課題としたい。

謝 辞

今回の発表の機会を与えてくださいました忠南大学校百済研究所張寅成所長、韓国の考古学成果の知識に乏しい筆者に現地の懇切な案内をいただき、多くの御教示を頂戴するとともに文献の探索など万端のお世話をいただきました山本孝文氏、北部九州の横穴式石室を案内いただき、種々御教示くださいました杉井健氏、蔵富士寛氏、文献等を頂戴し、御教示いただきました甲元眞之先生、和田晴吾先生、土生田純之氏、北条芳隆氏、吉井秀夫氏、朴天秀氏、熊本古墳研究会の皆様、経ノ塚古墳出土埴輪の写真を提供していただきました須藤隆教授、東北大学考古学研究室に、末文ではありますが厚く御礼申し上げます。

また、百済研究所における公開講座の場と討論者である朴天秀氏をはじめ多くの研究者の皆様から意見を頂戴いたしました。今後の研究に生かしていきたいと考えております。あらためて御礼申し上げます。

小論作成にあたり、図版作成に東北学院大学史学科4年伊東静香氏の協力を得ました。あわせて謝意を表します。

なお、本稿はすでに公表しました「柴山江流域の前方後円墳と倭国周縁域の前方後円墳」『百済研究』第44輯2006年が韓国語表記のため、同じ内容を和文で述べたものです。

註1 林永珍氏は広州堯基洞古墳を加えて14基とする(林永珍 2005)。現状で多くの研究者が13基としており、堯基洞古墳の測量図も入手できないことから、本稿では広州堯基洞古墳を検討の対象としなかった。

註2 墳丘の傾斜が急でこの技術が採用されている可能性のある古墳が宍岐まで見られ、日本列島までこの技術が広がっている可能性がある。

註3 考古学資料で人の移動を説明することには困難がともなう。遺物の分布の広がりや移動はモノの移動を示すものではあっても、人の移動を示すとは限らないからである。会津盆地では北陸北東部の特徴をもつ土器の出現と合わせて、北陸北東部と同じ間取りをもつ竪穴住居の出現、北陸に存在する周溝墓の出現の三つの要素を総合して人の移住を説明できると考えた。

引用文献（年代順）

- 辻 秀人 1989年「東南北部における埴輪工人の動向」『地方史研究』第39巻4号
- 柳沢一男 1991年「5前方後円墳と沖ノ島」『新版古代の日本 ③九州・沖縄』角川書店
- 成 洛俊 1992年『咸平禮德里新徳古墳緊急収拾調査略報』第35回全国歴史学大会論文及び発表要旨 歴史学会
- 姜 仁求 1992年『チャラボン古墳』三國時代遺蹟の調査研究(1) 調査研究報告書92-3 韓国精神文化研究院
- 姜 仁求、李 熙敦、具 滋奉 1992年「附篇；海南 昌里(龍頭里)マルムドム古墳測量調査報告」『チャラボン古墳』三國時代遺蹟の調査研究(1) 調査研究報告書92-3 韓国精神文化研究院
- 林 永珍・趙 鎮先 1993年「12) 霊光月山里月計古墳群」『霊光郡文化遺蹟学術調査』全南大学校博物館、霊光郡
- 成 洛俊 1993年「全南地方長鼓形古墳の築造企画について」『歴史学研究』第12輯 全南大学校史学会
- 林 永珍 1994年「光州月桂洞の長鼓墳2基」『韓国考古学報』31
- 林 永珍・趙 鎮先 1995年「潭陽郡の考古学遺跡」『潭陽郡文化遺蹟学術調査』全南大学校博物館
- 林 永珍(橋本博文訳) 1995年「光州月桂洞の長鼓墳2基」『古文化談叢』第34集
- 成 洛俊(大竹弘之訳) 1996年「韓国 全羅南道地方長鼓形古墳の築造企画について」『古代学研究』134
- 朴 仲煥 1996年「光州明花洞古墳」国立光州博物館学術叢書第29冊 国立光州博物館。光州廣域市
- 岡内三眞 1996年「前方後円墳の築造モデル」『韓国の前方後円墳 早稲田大学韓国考古学 学術調査研修報告』雄山閣出版
- 辻 秀人 1996年「蝦夷と呼ばれた社会—東北部社会の—形成と交流—」『古代蝦夷の世界と交流』王権と交流1 名著出版
- 小栗明彦 1997年「光州月桂洞1号墳出土埴輪の評価」『古代学研究』第137号
- 北条芳隆 1999年「讃岐型前方後円墳の提唱」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論文集』
- 小栗明彦 2000年「全南地方埴輪出土の意義」『百濟研究』第32輯
- 崔 完奎・金 鍾文・趙 圭宅 2000年「6. 七岩里古墳」『高敞の墳丘墓—分布と實測調査報告書—』遺蹟調査報告第三十九輯 圓光大学校馬韓・百濟文化研究所・高敞郡
- 林 永珍・趙 鎮先 2000年『全南地域古墳測量報告書』全羅南道・全南大学校博物館
- 近藤義郎 2000年a「前方後円墳観察への招待」青木書店
- 近藤義郎 2000年b「韓前方後円形古墳小考補遺」『ASIAN LETTER』第7号
- 李 盛周 2000年「墳丘墓の認識」『韓国上古史学報』第32号
- 辻 秀人 2000年「弥生時代から古墳時代への変容のプロセスの比較」『東北・九州における古墳文化の受容と変容に関する比較研究』平成9年度～11年度 科学研究費補助金(基盤研究(B)(1)) 研究成果報告書 研究代表者 上村俊雄
- 藤沢 敦 2001年「倭の周縁における境界と相互関係」『考古学研究』第48巻3号
- 近藤義郎 2001年「前方後円墳に学ぶ」青木書店
- 崔 完奎 2001年「北限の前方後円形墳—韓国・七岩里古墳ほかの墳丘墓—」、『季刊考古学』第76号
- 股 和秀、崔 相宗 2001年『海南方山里長鼓峰古墳試掘調査報告書』国立光州博物館、海南郡
- 小栗明彦 2002年「全南地方埴輪出土の意義」『埴輪論叢』第3号

- 吉井秀夫 2002年「朝鮮三国時代における墓制の地域性と被葬者集団」『考古学研究』第49巻第3号
- 東 潮 2002年「倭と柴山江流域流域—倭韓の前方後円墳をめぐって—」『前方後円墳と古代日朝関係』朝鮮学会編 同成社
- 金 洛中(竹谷俊夫訳) 2002年「五～六世紀の柴山江流域における古墳の性格—羅州新村里九号墳・伏岩里三号墳を中心に—」『前方後円墳と古代日朝関係』朝鮮学会編同成社
- 田中俊明 2002年「韓国の前方後円形古墳の被葬者・造墓集団に対する私見」『前方後円墳と古代日朝関係』朝鮮学会編 同成社
- 朴 淳堯(吉井秀夫訳) 2002年「柴山江流域流域における前方後円墳の意義」『前方後円墳と古代日朝関係』朝鮮学会編 同成社
- 柳沢一男 2002年「全南地方の柴山江型横穴式石室の系譜と前方後円墳」『前方後円墳と古代日朝関係』朝鮮学会編 同成社
- 大竹弘之 2002年「韓国全羅南道の円筒形土器—いわゆる埴輪形土製品をめぐって—」『前方後円墳と古代日朝関係』朝鮮学会編
- 山尾幸久 2002年「五、六世紀の日朝関係—韓国の前方後円墳の一解釈—」『前方後円墳と古代日朝関係』朝鮮学会編 同成社
- 朴沢志津江、佐藤公保、辻 秀人 2002年「角塚古墳—整備基本計画作成に伴う形態確認調査報告書—」胆沢町埋蔵文化財調査報告書
- 高木 晃他 2002年「中半入遺跡・蝦夷塚古墳発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第380集
- 柳沢一男 2003年「韓国の前方後円墳と中・北部」、「古代東アジアの異文化間交流と文化形成(東アジア異文化間交流史研究会第2回国際研究会議資料集)」
- 吉井秀夫 2003年「朝鮮三国時代における墳墓の構築過程について」『日韓交流の考古学的研究—葬制の比較研究—』平成11年度～平成13年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書
- 青木 敬 2003年「古墳築造の研究—墳丘から見た古墳の地域性」六一書房
- 辻 秀人 2003年『ふくしまの古墳時代』歴史春秋社
- 林 永珍 2004年(大竹弘之訳)「韓国 墳周土器の起源と変遷」『古代学研究』第164号
- 朴 天秀 2005年「柴山江流域における前方後円墳からみた古代の韓半島と日本列島」『日韓交流展 海を渡った日本文化』宮崎県立西都原考古博物館
- 青木 敬 2005年「韓国の古墳における墳丘構築法」『専修考古学』第11号
- 坂 靖 2005年「韓国の前方後円墳と埴輪」古代学研究第170号
- 林 永珍(白井克也訳) 2005年「韓国長鼓墳(前方後円形古墳)の被葬者と築造背景」『考古学雑誌』第89巻第1号
- 朴 天秀 2006年「柴山江流域前方後円墳を通してみた5～6世紀韓半島と日本列島」『百濟研究』第43号

Comparative Study of Keyhole-shaped Mounds (*Zenpoko-en-Fun*) in the Yomusangan Basin of South Korea and in the Peripheral Areas of Wakoku

Hideto TSUJI

Both Japanese and Korean researchers have studied keyhole-shaped mounds (*Zenpoko-en-Fun*) in the Yomusangan Basin of South Korea. It is useful, I think, to compare all of thirteen mounds in this area with keyhole-shaped mounds in the peripheral areas, especially the Tohoku district, of Wakoku, where I study.

First, I examined details of the thirteen burial mounds. Ten of them were not just imitations of external form of Wakoku's mounds, but places to celebrate a series of funerals. It did not accept a part of elements of Wakoku system, but embodied keyhole-shaped mounds of Wakoku from fifth to sixth century systematically. I can separate two groups in terms of top of tumulus; Group A with flat surface and group B without. Mounds of group A, relatively older ones, which have individual specialties, collected techniques of making a tumulus and a chamber, whenever constructed. Group B has considerable similarities in common, about method of making the top of front and aspect of the part of narrow. Regional group who constructed mounds of group B had a common imaging model of keyhole-shaped mounds. I can realize, however, common features of method of making a tumulus and of location to hill beyond the boundary between two groups. As for cave, these groups are accorded with classification by Kazuo Yanagisawa; Type of direct relation with north part of the Kyushu district is group A, and type of regional growth group B. For cylindrical earthenware cylindrical clay images (*Ento-Haniwa*) of three types which were excavated at mounds have the same function as that of Wakoku, and were made by regional techniques of making a earthenware.

It is evident that keyhole-shaped mounds in the Yomusangan Basin which had the same system of funerals, embodied by regional techniques, as that of Wokoku entered on another phase than the preceding system of funerals. In order to consider such a mound, it is useful to set mounds in the peripheral areas of Wakoku as a model at the time when they appeared in place of traditional tombs.

This paper examines three problems; large-scale social change from people's movement, emergence of distinct group in regional community, and political decision of regional society. As we cannot know aspects of village and general tombs yet, and regional society did not seem change largely in the light of using regional techniques for construction, I suppose that people might have chosen keyhole-shaped mounds as their mounds.